

「非常」時における非日常的娯楽

—震災後の東京ディズニーランドとプロ野球—

小池 真央

はじめに

みなさんは覚えておられるだろうか？「夢の国」の売り物の大きな人形が防災ずきんとなり、普段では決して表に出すことのないダンボールや使い捨て手袋が防寒具となった日のことを。2011年3月11日午後2時40分、千葉県浦安市は震度5強の地震に襲われ、「夢の国」東京ディズニーリゾートで楽しんでいたゲスト（来園者）約7万人の笑顔が一瞬にして不安へと変わった。しかし、1万人のキャスト（従業員）は少しでもゲストの不安を取り除くために、自身の判断でパーク内にある様々なものを無償でゲストに配布し、天井のシャンデリアからゲストを守る「妖精」となり、ゲストの身体的な、そして精神的な安全を守ろうと最善を尽くした。

その行動は後に「すばらしい危機対応だった」とメディアで大きく取り上げられることとなる。震災後、東京ディズニーリゾート内の安全確認作業は3月18日までには終了していたが、オリエンタルランドは計画停電による不足の事態に備えて「震災後、1か月間は喪に服す」と決定する。そして、政府が4月8日計画停電を実施しないという方針を表明したことを受け、4月15日東京ディズニーランド、4月28日東京ディズニーシーが再開した。新聞各社は開園前に入場ゲート前にできた来園者約1万人の行列を大きく取り上げた。

しかし、これとは対照的にメディアに激しく叩かれた、プロ野球の開幕日騒動についてもみなさんは記憶しておられるだろう。被災地・仙台をフランチャイズに抱えるパ・リーグが早々に開幕延期を決めたのに対し、セ・リーグはあくまで頑なであり、地震発生直後の3月15日には「予定通り3月25日開幕」の方針が臨時理事会で打ち出されたのである。

選手会と世論の反発や、文部科学省からの「ナイター自粛要請」を受け、あわててセ・リーグは開幕を3月29日に延期したものの、高木文部科学相や蓮舂節電啓発担当相の要請を受け、結局パ・リーグと同じ4月12日の開幕、東電、東北電力管内の4月中のナイター自粛を決めた。メディアにおいては特に実質上の最高権力者である渡辺恒雄・巨人球団会長の発言

が物議をかもした。

テーマパークのような娯楽施設も、スポーツ観戦も、人々がお金を払って日常から離れ、非日常空間を楽しむという点では同じものである。しかし上記のようにメディアの中では、これら2つの娯楽に対して違ったスタンスがとられた。では、これら2つの娯楽に対して一般市民はどのような意見を持ったのだろうか。メディアと同じように東京ディズニーリゾートは受け入れられたのに対し、プロ野球は批判されたのだろうか。本稿では2つの非日常空間の共通点や相違点に着目して Yahoo!知恵袋に寄せられた東京ディズニーリゾートとプロ野球開幕騒動への質問に対する回答を分析し、これら2つの娯楽について考えていこうと思う。

電力問題に関して — 「非常」時における「非日常」

はじめに東京ディズニーリゾート¹⁾ (以下 TDR と略記) とプロ野球²⁾ の震災後の一連の流れを確認しておく。

TDR (株式会社オリエンタルランド)	日付	プロ野球
全アトラクション休止。12日は休園して点検することを決定。周辺ホテルも休業。	03.11 震災発生	横浜 vs ヤクルト 楽天 vs ロッテ 以上2試合がコールドゲームへ
帰宅できずに園内にとどまっていた入園者がすべて退園。 当面の休園と、21日をめどに再開時期を判断すると公表	03.12	
(政府) 東京電力が計画停電を開始	03.14	
	03.17	日本プロ野球組織が公式戦開幕日を発表。セは予定通り開幕(03/25)、パは延期を決定(04/12)
休園を21日以降も続けることを決定。 同日までに建物やアトラクションの安全確認終了、被災地へ1億円拠出	03.18	高校野球は予定通り03/23開幕 文科相ナイター自粛要請 →セ開幕延長示唆
(休止期間中キャストに6割の賃金を支給)	03.19	横浜 義援金2000万を拠出 セ29日開幕を決定「延長戦をしない」 節電対策を公表
	03.23	大学野球は予定通り04/09開幕

		巨人選手会が JR 水道橋駅等で募金活動
	03. 24	セ 04/12 開幕、4 月中のナイター自粛を決定
イクスピアリ営業再開	03. 28	
	04. 02	プロ野球のチャリティマッチ
(政府) 計画停電を原則実施しない意向を発表	04. 08	
04/15 再開を決定。(ランドのみ) ・入園者一人に対して 300 円拋出。 ・ディズニーランドホテル宿泊者から 1000 円拋出。 ・ We are one というリストバンドを 300 円で発売。 ・閉園は 18:00	04. 12	
ディズニーシーを 28 日に再開することを決定。ランドは 23 日から夜間営業も行う。	04. 20	

さて、本稿が分析する資料だが、Yahoo!知恵袋のトップページから「TDR 野球」と入れて検索をかけ、TDR 再開とプロ野球の開幕日騒動について、特に「プロ野球の開幕日騒動は多くの批判を浴びたが、TDR 再開については同じように批判されるのか？」という主旨のものを複数取り上げた。取り上げた質問項目のうち、回答数及び閲覧数が比較的多いもの、回答の内容が論理的なものを取り上げて分析したが、TDR は東京ドームよりもずっと大きな電力を消費するのではないか、経済を大きく回すというが野球観戦でも経済は回るのではないかという問題が特に取り上げられていた。

質問に対して、ある人はこう回答している。

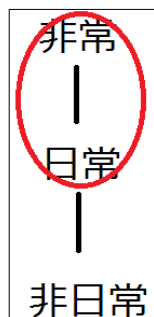
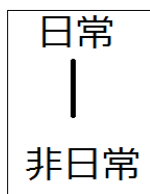
電力いっぱい使って現実逃避するような娯楽施設は現時点の日本において必要ない。今はまだ夢を追うような段階ではない。³⁾

TDR とプロ野球、2 つに共通して言えることは、「はじめに」でも述べたように「非日常を楽しむもの」である。この回答者は、おそらくこの共通点を論拠に TDR とプロ野球、両方に反対している。

こうした意見はどのように考えられるだろうか。人々の普段の生活には、「日常－非日常」という枠組みしかなかった。非日常は、上記のような娯

楽施設に行くことで楽しむことができる。娯楽施設には電力が必要であるが、日常に必要な電力が潤っていれば特に非日常で使うことに何の問題もなかった。

しかし、震災のような「非常事態」が起これるとわく組みは三つに変化する。人々は非常にたき込まれ日常に戻ることでさえ危ぶまれる。そうした状況ではわく組みは非常と日常の実質二つに絞られてしまう。まずは非常から解放されて日常に戻るために人々は必要なもの（電力）をこの二つの枠の中で使おうとする。「暮らしに必要な電気を削ってまでも遊ばなきゃならないものはあるのですか？」⁴⁾という意見や、「娯楽施設の為に節電を頑張っているんじゃない」⁵⁾という意見にはこのような非常と日常の二つのわく組みだけが考えられ、優先されていると考えることができる。



このように、TDR とプロ野球という 2 つの娯楽を「非日常空間を楽しむもの」という共通点を持ったものとして見た時、今回の震災のような非常事態が起こった場合には少なくとも電力等の資源配分という視点から非日常的な娯楽は批判されやすいといえるだろう。

しかし、「はじめに」で述べたメディア上での反応と同様に、今回の分析でも「電力を使うから TDR もプロ野球も両方反対！」という回答よりも、あるいくつかの理由から TDR 再開を擁護する回答の方が多く見られたのである。では、なぜ TDR はプロ野球のような大きな非難を逃れることができたのだろうか。

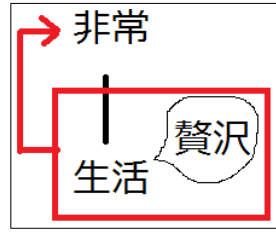
TDR 勝利の理由

(1) 経済に関して — 「非常」時における「贅沢」

TDR が世論からの大きな非難を避けられた理由の一つは、「TDR はプロ野球よりも大きな規模で経済を回すことができるから」である。次のような回答がその典型である。

地方からディズニー目当てで訪れる観光客も多く、東京ドームのそれとは比較になりません。家族同士で訪れて大金を起こしてくれる施設です。単純に来場者数と、一人あたりが使う金額で考えてもドームとは比較になりません。⁶⁾

震災後、自粛モードと言われたが、そうやって自粛しては経済がまわらないという議論もしばしばあった。日常では、普段の生活に多少の贅沢を取り入れることによって経済は回る。しかし非常の際は普段のように、もしくは普段以上に日常、つまり生活の中に贅沢をどんどん取り入れてお金を使わない



と、非常の地へお金を回すことができない。そして、特に人々が贅沢をしてたくさんお金を使い、莫大な経済効果を生み出すところが TDR である。だから、TDR は再開すべきである。これが、先述した回答の元になっている考え方だ。

具体的に経済規模にどのような差が生まれているのだろうか。まず挙げられるのは雇用者数の違いだ。TDR では大量の雇用が生まれている。オリエンタルランドで働くキャスト数は正社員 2201 人、テーマパーク社員 777 人、準社員 18066 人であり⁷⁾約 2 万人の雇用が生まれている。一方、プロ野球の場合例えば株式会社東京ドームで働く従業員の数は 813 人⁸⁾。雇用者数から見ても明らかに TDR の方が上である。

次に挙げられるのは経済を動かす範囲の違いである。TDR には地元住民だけでなく日本各地から人が集まるため、TDR だけでなく旅行会社や交通機関にまでお金が回る。一方、プロ野球の場合は同じような規模のスタジアムが日本各地に存在するため人々の移動は家からスタジアムまでの移動に留まってしまい、TDR のような全国規模の経済効果は生み出さない。

最後にあげられるのは収容人数の差である。2010 年の来園者数はランド、シーを合わせて単純計算で 1 日平均 7 万人⁹⁾だった。各々の人はアトラクションだけではなくおいしいものを食べ、おみやげを買い、様々な形で消費活動を行う。野球でも、応援のためのバットやユニフォームを買い、そこにしかないおいしいお弁当やビールを買って観戦をする。だが、東京ドームに応援に来る人は約 4 万 5 千人¹⁰⁾。この人数の差は大きい。

以上三つの経済効果の差によってプロ野球よりもより経済をまわし、非常の地を含んだ日本経済全体を活性化することができるとして TDR は世論からの非難を免れたのである。

しかし、こう考えるだけでは大きな経済効果をもたらさない小さな企業はみんな自粛すべきだということになる。単に経済効果の大小だけが問題とされたのではない。経済に関してよりも、もっと重要な TDR 勝利の理由について、次の項で述べようと思う。

(2)メディアの使い方に関して ―ナベツネ vs ミッキー

「はじめに」でも述べたように TDR の危機管理は様々なメディアで高く評価された。例えば、Mr. サンデーというフジテレビ系列の報道番組が放送した「7万人命守った危機対応 3.11 ディズニーの真実」¹¹⁾では、あるキャストが余震の続く中自らが揺れるシャンデリアの真下に立ち、「みなさん大丈夫。ぼくはシャンデリアの妖精です。何があってもみなさんを守ります。」と話し、子どもたちを笑顔にしつつ危険から遠ざけたことや、じっと座り込むゲストに「皆さん、おみやげ袋をお持ちですか？この中に隠れミッキーがいるのをご存知ですか？」と笑顔で語りかけ、場を和ませたことが取り上げられた。

また、日本経済新聞では、この危機管理について「オリエンタルランドーマニュアル超え危機管理(大震災企業はどう動いた)」という見出しで、年 160 回行われる防災訓練によって培われたキャストと呼ぶアルバイトの高い危機管理意識について高く評価されている¹²⁾。さらに、オリエンタルランドは、節電への取り組みもインターネットを通じて大衆に報じている¹³⁾。パーク内の様々な場所でゲストに負担がかからない程度の節電を行い、太陽光や天然ガスを活用した自家発電設備(コ・ジェネレーションシステム)の導入や、今後太陽光パネルを増設するなど、オリエンタルランドは世論に向けて具体的な電力問題への取り組みを示してきた。

プロ野球には TDR のようなメディアで大きく取り上げられるような震災に関する人々の共感を呼ぶ物語がなく、彼らが具体的な電力問題への取り組みを打ち出す前(しかも震災から一週間もたたないうちにセ・リーグが予定通り 3 月 25 日の開幕を決めてしまった。さらには渡辺恒雄が語った、「開催延期というのは俗説」「パ・リーグは好きにすればよい」¹⁴⁾という言葉をきっかけにメディアはプロ野球を批判的に取り上げたのである。悪役「ナベツネ」が現れたことによって人々はプロ野球という娯楽としての非日常をカネという日常の問題として捉え、プロ野球を批判したのである。

では、これに対して TDR はどうであったのか。

東京ドームのナイターの裏には「ナベツネ」という悪役がいたのに対し、ディズニーの裏には「ミッキー」や「夢の国」という世間の人気を得ているものがあったから、気分や感情で判断が狂う人たちは、ついついディズニー再開を支持してしまうのです。ディズニー側も巧妙で、自家発電や節電の努力(自家発電で 100%まかなえるわけではな

いのだけど) や、震災時に園内にいた人達をサポートした美談や、「こんな時こそ人々に夢を」といった美辞麗句を上手にアピールして、世論を味方につけるのに成功しましたし。¹⁵⁾

このように TDR に存在したのは「ミッキー」という人気者だった。ミッキーは「夢の国」で人々に現実世界では決して手に入ることのない夢と魔法を与え、人々はミッキーから夢と感動をもらう。「夢と魔法の王国」というキャッチフレーズに象徴される「完全なる非日常」の世界を構築した TDR に勝てるものはもはや存在しないだろう。「夢の国」や「ミッキー」という非日常性を武器にして TDR はメディアに立ち向かった結果、世論の非難を免れることができた。というより、人々が非難できなくなったという方が正しいかもしれない。

おわりに

日本のシンボルと化している東京ディズニーリゾート。30 年かけて積み上げてきた「夢と魔法の王国」というフレーズはもう剥がすことはできない。このフレーズによって今回も世論からの非難を避けることができたといえる。もしこれから批判されるような状況になったとしても、「ミッキー」や「夢の国」という言葉によって世論を味方につけることができるだろう。果たしてプロ野球、その他の娯楽に誰からも批判されることのないフレーズは存在するだろうか。

震災から 2 年。東京ディズニーリゾートは 30 周年という節目の年を迎え、盛り上がっている。プロ野球も以前と同じように 3 月にはシーズンが開幕する。非日常的娯楽が盛り上がる中、「非常」の被災地はまだ復興と呼べるには程遠い状態だ。ここで一度立ち止まって、日本の非日常的娯楽のあり方について考えてみてはどうだろうか。

注

- 1) ディズニーの流れについては『日経MK (流通新聞)』1 ページ 2011. 4. 18 と「オリエンタルランドの東日本大震災に対する支援について」<http://www.olc.co.jp/earthquake/index.html> を参照した
- 2) プロ野球の流れについては『毎日新聞』2011. 3. 11～4. 2 を参照した
- 3) 質問「東京ディズニーリゾート再開について、皆様は賛成か反対か私は反対！」への 2011. 4. 4 の回答。http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1359173203 (以下 Yahoo! 知恵袋については URL 最

後の固有番号のみ記載。)

- 4) URL は注 3 に同じ。2011. 4. 1 の回答
- 5) 質問「娯楽施設の営業に関してのご意見」2011. 3. 26(q1058649225)
- 6) 質問「東京ドームでのプロ野球開催に反対された人達はディズニーランドの再開にも反対ですよね？」への 2011. 4. 1 の回答。(q1359148893)
- 7) 「東京ディズニーランド」<http://www.olc.co.jp/TDR/profile/tdl/>
- 8) 「株式会社東京ドーム会社案内」<http://www.tokyo-dome.jp/corporate/>
- 9) 「入園者数データ」<http://www.olc.co.jp/TDR/guest/>を参照した
- 10) 「日程・結果」<http://www.giants.jp/G/schedule/201211.html>
<http://www.giants.jp/G/schedule/201211.html>のうち、東京ドームで行われた試合の集客人数を参照した。
- 11) 2011. 5. 8 放送 <http://www.youtube.com/watch?v=VOWW8AqHkWI>
http://www.youtube.com/watch?v=152Fr_aPmk4
- 12) 『日本経済新聞』2011. 4. 16
- 13) 「ディズニーテーマパークにおける節電の取り組みについて」
http://www.olc.co.jp/wpmu/wp-content/blogs.dir/2/files/2011/04/20110419_03.pdf
- 14) 「『プロ野球』開幕日騒動で惨敗した『渡辺恒雄』読売新聞主筆の黄昏」
『週刊新潮』2011. 04. 07, pp. 45-46
- 15) 質問「ディズニーリゾートが開園しましたね。節電してるらしいけど…」への 2011. 4. 30 の回答。(q1061215155)

TDR に関する新聞記事を分析していた時、ある記事が目にとまった。それは 2011 年 5 月 23 日の日本経済新聞朝刊 16 頁に記載された、金沢工業大学大学院教授杉光一成氏の意見である。震災後、東京ディズニーランドが営業を再開したときに多くの日本人が喜ぶ姿を見たが、少し寂しかった。なぜ海外のコンテンツなのか、と。

TDR には日本にしかないアトラクションや施設もあるが、テーマパークとしてのコンセプトやディズニーキャラクターは全てウォルト・ディズニーが作り出したものである。また、本文でも紹介したように、震災当日の TDR のキャストの行動は素晴らしかったが、それはアメリカから直輸入したマニュアルに従って教育されたキャストが行ったことである。つまり、TDR の「もの」も「人」もアメリカが生み出した文化なのである。

日本人はどのようにアメリカが作り出した「ディズニー」という文化を受容してきたのか。これについても調査しながら、日本の非日常的娯楽のあり方について考えることを今後の課題としたい。

小池真央